

大阪 A・P・S コンソーシアム 介護スキルラボ
介護職技能実習生に対するベトナム講師派遣報告書

実施期間：2019年2月10日（日）～2019年3月9日（土）

実施場所：ベトナム ハノイ ホアンロン教育第2センター

報告日：2019年3月27日（水）

報告者：社会福祉法人愛和会 西口 雄大



1. 目的

- (1) アジア健康構想の一環として、外国人技能実習制度において介護職に関する知識・技能の移転、人材還流。
- (2) 現地学生の生活環境を理解し、日本の生活・仕事に早期に慣れる環境（物的・人的）を整える。

2. 授業・カリキュラムについて

(1) Cクラス 11名（全員 N4取得済み N3：3名取得済み 2019年3月9日現在）

講義内容

- 1) 食事に関連したところとからだの基礎知識
- 2) 入浴・清潔保持に関連したところとからだの基礎知識
- 3) 排泄に関連したところとからだの基礎知識

テキスト「外国人のやさしく学べる介護の知識・技術」「介護職員初任者研修テキスト」を併用して展開する。

成果と所感

ホアンロン講師から N3 試験受験時期にあり、学生が苦手としている試験項目である『聴解』と『会話』を学習する機会として、日常の会話スピードで講義を進めてほしいと依頼があり対応する。教科書の音読に関して学生の差はないが、実技の声掛けは、助詞・動詞の使い方が曖昧であるため、グループ分けを工夫し、学生間で指摘・指導し合える環境を設定し、講師自身も直接指導することで対応する。介護技能実習評価票に基づく介護実技の確認 11 名を確認に 2 時間要し、今後の課題と考える。その他の実技指導に関しても、デモンストレーションを実施したうえでの実習になるため苦慮した。

(2) Dクラス 4名 (全員 N4 取得済み)

講義内容

- 1) 「介護職員入国後講習用テキスト」を基本として「移動・食事・排泄・衣服の着脱・入浴」実技
- 2) 「やさしく学べる介護の知識・技術」を基本として「尊厳の保持と自立支援」「介護におけるコミュニケーション」「老化の理解」講義

成果と所感

日常の会話の速さでは、聞き直すことが度々みられる。授業態度は、分からない単語は「わかりません」と素直に聞き返し理解しようとする姿勢がみられる。Dクラスのホアンロン専門学校の入校が12月であることからCクラスより通訳量が多い。休憩時間も学習時間と捉え、日本語で話すように声をかけて、聴解・会話に慣れる環境を設定する。考えている際の舌打ちが目立つため、都度注意することで改善がみられる。講義中に実際の「フェイスシート・アセスメントシート・個別援助計画書・経過記録など」様々な書式の入力がパソコンや手書き入力であり、特に手書き入力に関しては日本人職員の文字の特徴から、読めないとの声が大半を占めていました。ホアンロン専門学校の教材も手書きの教材は無いことから、課題として、現場での改善・対策が急務であると感じました。



3. 自身の活動について

(1) 学生の生活環境を知る。(ホアンロン専門学校の寮に宿泊して見えてきたこと)

学生の1日の生活(月曜日から土曜日)土は隔週で授業/日曜は故郷に帰る学生が多い。

6:00	体操・ジョギング 5S・報連相を唱和
6:40	食事・清掃後自由時間
8:00	授業開始

16:30	授業終了後自由時間
18:00	夕食
19:30	自己学習（各教室で実施）
21:30	自己学習終了後、寮に戻り自由時間（予習・復習）
23:30頃	就寝

（朝の体操・ジョギングの様子）



（夕食後の自習時間）



1日の授業日程は、8時開始で45分授業×8コマ（合計6時間）で構成され、夕食後、自習2時間を足して、8時間の日本語学習の時間である。さらに、各自寮に戻り1～2時間自己学習している。

ホアンロン専門学校の入校金額は約50万円であり、APS学生らの保有資格である看護師の平均月収は4万円程であることも考えると、日本で働く覚悟と強い決意を改めて感じ、APSの活動の責任の大きさを痛感した。

(2) ベトナムでの生活を学生に置き換えて考える。

技能実習生は、3～5年日本で生活する。さらに、上記理由から本国に送金をしたいという目的があるが、日本国内外の旅行・観光をしたいと希望があります。これらを達成するためには、日常の生活が安定しないと成し遂げられないと考え、以下に着目した。

1) 職場環境に慣れ継続的に仕事をする

2) 生活環境を整えること

1) 職場環境を整えるためには、はじめに『協働』の意識を持つこと、特に技能実習制度の特性と日本人の新人入職との違いを法律的な観点から説明し理解することである。次に、ベトナム国・文化・生活習慣・価値観・技能実習生の背景など、自身の講師派遣の体験を伝え情報を共有することである。実体験からベトナムに派遣された時の率直な気持ちは、孤独・孤立・身近な相談相手がいないという不安しかありませんでした。それらを解消してくれたのは、『人』でした。ホアンロン専門学校の先生方は困った時に声をかけてくれ、手を差し伸べてくれることに大変救われました。現職場である愛和会もそのような職場でだれしもが関心を持ってくれる施設にしたいと思います。カリキュラムでも、課題として挙げた手書き入力に関して、記録物の洗い出しを行い、早急に対応していきたいと思います。

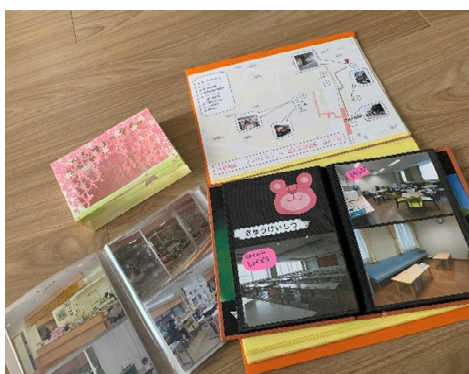
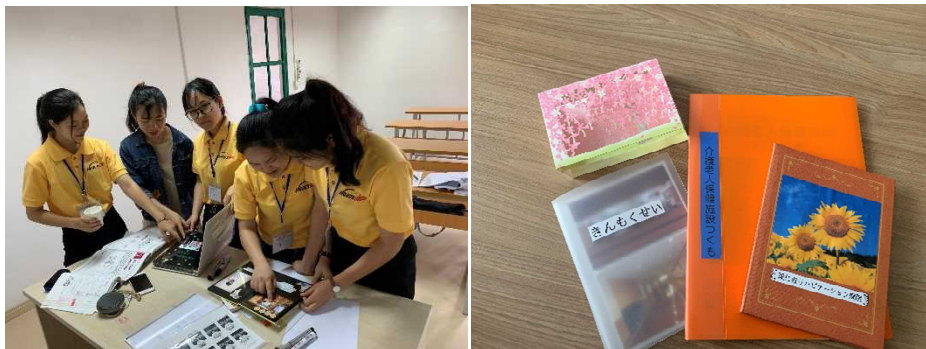
2) 生活環境を整えることについても、実体験から「経験値0と1の違い」を大きく感じました。私の場合は、体験がない移動手段の確保のために、「バス・バイクタクシー・タクシー」と各交通手段に不安から下調べをして、決断するのに時間を要しました。しかし、2回目以降は、1度体験していることからそれらの不安はほぼなくなっていました。APSの学生らには、電車・バスに乗ったことがない学生もいます。

経験値0の状態から1にする際に、生活支援員だけで対応することは人的に困難であり、限界があります。大事なことは生活支援員だけではなく、職場の多くの職員が支援することであり、他に物的な環境を整えることが重要であると感じます。

(3) 学生の不安を解消すること。

2019年2月時点で、学生は日本に行ったこともなく、実習予定の2施設のアルバム写真しかなく、イメージが掴みにくく不安を抱いていた。その不安の解消とモチベーシ

ョンを高めることを目的として、配属先にアルバム写真の作成を依頼した。2019年3月7日に閲覧することができ、職員からのメッセージやユニフォームを念入りに見て「かわいい」など笑顔でアルバムを見ていた。



4. まとめ

ベトナムでの生活から、学生らは多くの不安を抱え、間もなく入国する。私のベトナム生活を支えてくれたのは、数えきれない人である。第2フェーズに向けて、ベトナムの学生と関わった経験を活かし、職場の軋轢を最小限にし、相互にWIN-WINの関係で協働していける職場環境を整えたい。

最後に、講師派遣を支えていただいたAPSのメンバー並びに愛仁会、愛和会皆様に心より厚く御礼申し上げます。

